

第3回 横須賀市都市計画マスタープラン見直し検討会議 議事録

日 時：平成27年3月19日(木)15:00～

場 所：消防局庁舎4階災害対策本部室

参加委員：15名

事務局：都市計画課、株式会社 集計画研究所

1. 開会

2. 第2回検討会議における意見等に対する考え方について

●事務局からの説明後、質疑応答

委員長 「将来の人口と世帯数」のグラフに1世帯あたり人員数が入ったが、数字を見ると2013年以降の2.31人/世帯から2.40に上がり2.36と下がり落ち着いていくが、根拠を確認しておいてほしい。都心部にワンルームマンションではなくて、ファミリー用の住宅がたくさん供給されるということであれば、それまで減ってきた1世帯あたり人員がいったん2.40人に増えるということになり、単身者は大きく減り、家族が大きくなるという予測になる。これはあまり気にしなくて良いことなのか、それとも政策的に大きな世帯を呼び込んでいるので、当然2.31から2.40になるが横須賀ではどうなのか、確認しておくように。

事務局 世帯数自体の考え方で総計をとっているわけではないので、ここでは単純に割った数字になっている。この部分については、推計の部門と相談して数字についての確認をとってみる。

3. 議事（都市づくりの方針について）

●事務局からの説明後、議事

委員長 都市づくりの方針についての発言をお願いしたいと思う。
最初に欠席の委員から提出されている意見を事務局から紹介していただく。その後で皆さんとの議論に入りたい。

事務局 《委員の文書意見》
大きく3つの点について意見をいただいた。
1つ目は、第3章 都市づくりの方針の構成について違和感を感じる。
「環境共生型都市づくりの方針」と「災害に強い都市づくりの方針」、そして「その他の都市施設等の整備の方針」の中の、「福祉のまちづくり」及び「安全で安心なまちづくり」は、都市づくりの目標をかみ砕いて、都市の性能、パフォーマンスとして説明したもので、都市の物的環境の整備や保全の方針である土地利用、交通

体系整備、都市空間の魅力づくり、住宅地整備、その他の都市施設等の整備の諸方針と並列にするべきではない。

環境共生、災害に強い、福祉が行き届いている、安全安心といった性能をもつ都市をつくるためには、どのような都市構造、土地利用、交通体系整備、アーバンデザイン、住宅地整備、その他の都市施設等が必要なのかを説明したうえで、各分野の方針を示すような構成にするのが良いと思う。プラン全体として、ストーリーがうまくつながるよう構成を再検討すると良いと思う。

2つ目は、「縮退」という言葉を使うべきかどうかという意見である。46 頁を中心に「縮退」という言葉が使用されているが、市街地は縮み退くというイメージではなく、場当たりに空洞化する、低密度化する、スポンジ化するイメージだと思う。

「縮退」を空洞化あるいは低密度化に書き換えた方が良いかもしれない。

3つ目は谷戸地域の斜面緑地の取り扱いに関する意見になる。58 頁を中心に谷戸地域の斜面緑地の保全が提案されている一方で、46 頁では斜面緑地の開発を許容することを前提としている。人口減少と環境共生の時代なので、むしろ斜面緑地の開発を積極的に抑制し、開発を拠点に積極的に誘導するメリハリのある方針、施策展開が必要ではないか。

委員長 1つ目の意見はもう少し簡単に言うとどういうことだろうか。

事務局 組み立て方の考え方を委員から言われていて、大きな意味ではコンパクト化と都市魅力という括りの中で方針を示し、その後で補足的に内容を説明していく組み立てが良いだろうという話だった。実際に並列的に資料の方では説明してしまっているので、その辺は整合をとるようにしたいと思う。

委員長 今日の議論の中では、そこを気にしなくても大丈夫なのか。その考え自体に意見があれば議論していただくということでよいか。

事務局 そうしていただきたいと思う。

委員 都市づくりの方針、42 頁の「②中密度住宅地」の記述は、45 頁の「土地利用方針図」ではほとんど旧市街地や谷戸のエリアであり、この書き方では専門家以外には分かりづらいと思う。

43 頁の「⑨農地・農業集落地」の文中に「優良農地」とあるが、普通の農地との違いは何か教えてほしい。

47 頁の「③古い開発の住宅団地での土地利用誘導」に「公共交通の充実」とあるが、「既存のバスの路線をもう少し団地の縁までもっていく」と書く方が分かりやすいのではないか。

52 頁の「はしご型（ラダー型）の幹線道路ネットワークの模式図」において、縦軸幹線道路の東京湾側は国道 16 号、相模湾側は国道 134 号であることが分かる。

また、主軸は横横道路だろう。図中に道路名称を記入して、分かるようにした方が

良いと思う。

53 頁の「①鉄道交通の強化」に久里浜から三浦市の方へ向かう路線の「複線化整備の促進」とあるが、できないものを書くのはどうなのだろうか。

62 頁の「⑥河川の保全活用」には「護岸敷、橋を市民が身近に親しめる～」とある。しかし、横須賀市の場合、堤防がつくられるほどの大きな川はなく、すべて地面から下を掘り込んだ川なので水面近くに降りられず、身近に感じることはない。これもできないことであり載せてよいのだろうか。

また、64 頁の「⑤災害に強い谷戸地域のまちづくり」に「防災トンネルの整備、谷戸上部の開発に合わせた主要道路の整備」とある。横須賀市の場合、すでに防災トンネルは必要な場所ではほとんどできていると認識している。もし谷戸を新しく開発するのであれば、防災トンネルも含めて整備した方が良い。防災トンネルの整備単独よりも、谷戸の開発に併せて必要であれば防災トンネルや防災道路をつくっていくという表記の方が分かりやすいのではないか。

委員長 意見は大きく括って、「用語が分かりづらいこと」、「疑問に思える政策のこと」、53 頁の「鉄道の複線化」の 3 点と思うが、各々どんな方針で行くかを事務局に説明していただきたい。

事務局 用語については、説明資料をつくり分かりやすく読めるようにしたいと思う。
ラダー型幹線道路の縦軸幹線道路については、名称を入れたいと思う。
鉄道の複線化について、都市マスの記載は 20 年後に向けて、実際に計画の中で行うものと、20 年後に実現性は低いが政策的に必要であろうというものの 2 種類に分けられる。
鉄道の複線化は、観光による集客や交流機能の強化、住民の利便性といった観点から北下浦地区や広域的な交通として三浦市まで捉えると、今回の都市マスにおいて政策的には必要になると考えている。
防災トンネルについては、「開発に併せた」といった記述にさせていただきたいと思う。
河川の親水性については、水面まで降りられれば親水性があるというイメージがあるが、河川によっていろいろな事情があるので、表記を検討させていただく。

委員 鉄道の複線化は横須賀市も三浦市の人も喜ぶと思う。だが、鉄道事業者にとっては収益が上がる見込みがあって初めてやっていくことだろう。それには横須賀市から「こういうまちづくりをするから複線化にしてくれ」という表記が必要ではないか。漫然と事業者に複線化のお願いするだけの内容が、マスタープランに入っていることに疑問を感じる。

委員 連合町内会の会議の中で、財政部から横須賀市の公共施設のマネジメントを見直す話を先日聞いた。人口減少や少子化によって学校等の公共施設に対して増資が見込めないため、用途が低い、あるいは維持管理費が高い施設は淘汰していこうという

話だった。こうした大きな変更が今後見込まれることを、このプランの中に盛り込まなければいけないという気がする。

事務局 公共施設の整備費についての話になると思うが、今回は土地利用という中での考え方になる。公共施設の方は、このプランの中では触れないと考えている。

委員 例えば、学校の廃校がこれから相当に起こると思う。その跡地利用の問題なども出てくると思う。その対応についてはどうなのか。

事務局 学校の跡地利用など、使われなくなった施設の土地をどのような土地利用にしていくなかということになれば、都市マスの中でも考えていかなければならない。例えば、日産工場跡地も土地利用転換ということで、高校が入りサッカー場ができています。跡地ができた段階で地区計画をつくることもできるので、全体の需要を見ながら考えていきたいと思う。

委員長 2つ聞きたい点がある。災害に強い都市づくりでは、小学校の避難や避難路の整備といったことが土地利用や公共施設とどう絡んでくるのか。もう一つは、都市マスの中のコミュニティ計画ということで、地域の中でまちをどうつくっていくかという話も出てくると思うが、それはどんなふうになりそうだろうか。

事務局 例えば、地域の中で小学校が拠点になっている場合は、代替の施設があるのか、あるいはどのように統合していくのかといったことを個別に検討していきたいと思う。

2点目のコミュニティ計画について、詳しくは、今後の地区別のまちづくり方針の中で議論させていただきたいと思っている。都市計画は、ある程度面的な記述が多くなる。施設の適正化の中で、ピンポイントの施設についての議論もあるが、一団の土地の広さを勘案しながら地区別の中で盛り込めるものが出てくるようであれば、記述を考えていきたい。

委員 総合的に見て、住民や自治体、企業、専門家が一体になったまちづくりにおいては、ユニバーサルデザインは重要な考え方だと思う。横須賀だけではないが、少子化や高齢化、人口減少に関連した、どこにでも通用するユニバーサルデザインのまちとして、メリハリをもった考え方を示してもらえればと思っている。また、資料の方針には横須賀だけではなく他の都市にも共通する内容がいくつもあるが、当面、横須賀では交流人口を増やす取組みが特に重要なので、ボリュームをもたせると良いと思う。

事務局 指摘の通り、交流人口を増やすということでは、訪れてみたいまちは住みやすいまちということで、都市マスの中で触れていくことは重要だと考えている。ユニバーサルデザインについては、外国の方も障がいをもつ方も、子育て世代の母親、子どもにも、だれもがという指標があり、都市マスの中でもユニバーサルデザ

インという視点の中で取組みを記載している。62 頁の「(3) 地域にふさわしい魅力的な街並み形成」や 51 頁の「⑦ユニバーサルデザインにも配慮した道路空間の整備」など、随所にエッセンスを散りばめている。

委員長 17～18 頁の都市づくりの課題の 5 項目に全体の根本の考え方がある。交流人口については、「(2) 都市魅力の創造」に書かれているが、さらに強調した方が良いという点があれば意見を出していただきたい。

ユニバーサルデザインについては、17 頁の「(3) 暮らしやすい環境の形成」に基本となる課題が謳われているが、ユニバーサルデザインのコンセプトが十分に書かれているかをチェックしてもらえると良い。

委員 51 頁のユニバーサルデザインに関連して、学生が車椅子や杖を使って街に出るという体験授業では、車椅子が排水溝にひっかかり通行しづらいことや、杖が路面で滑り転倒の危険があることなどが分かる。高齢者が増える傾向が示される中で、歩行者や自転車だけでなく、車椅子や杖を利用する方も含めて、対象者を広げた方が良いのではないか。「ユニバーサルデザインにも配慮した道路空間の整備」という言い方も、よりユニバーサルデザインに注目できる表現になると良い。

また、横須賀は外国籍の方も多いので、道路標識を読み間違えて事故を起こすケースもあると聞く。道路標識や街灯にユニバーサルデザインの表示を行い、しっかりと安全で事故が起こらないようにする視点も入れてはどうだろうか。

事務局 ユニバーサルデザインの記述については、今後も勉強させていただきたいと思う。

委員長 ユニバーサルデザインは、大本となるような市全体の方針が別途にあるのだろうか。

事務局 ユニバーサルデザインに特化したものはないが、市全体としてユニバーサルデザインへの考え方をもっているので、関連する所属と調整しながら記述について検討していきたいと思う。

委員 確実に人口が減り、一人暮らしの方が増える中で、プランを全般的に見ると理想がとて多く書かれている。人口が減り厳しい状況になるという方向の考え方で、もう少し記述した方が良いのではないかと思う。

個別には、42 頁の「①低密度住宅地」については、46 頁の「②谷戸地域の低密度化・環境改善・活用」の記述との関連で、コンパクトシティによって一定の人口密度を保つために集積をしようということであろう。そして、谷戸の中でも駅が近く利便性が高いところでは活性化を図れるだろうが、駅から遠くフェードアウトしていく可能性が高い谷戸地域もあるということだと思うが、そのあたりの記述が曖昧だと思う。

事務局 都市マスのつくり方の話としては、「人口減少で高齢者が増えて街の規模は小さくなる」と厳しく書くこともできるが、計画なので少しは明るいところを考える必要

もある。人口減少は止められないが、減少を少しでも抑える方策を載せていかなければならないと考えている。

谷戸をどこまで峻別していくかを今の都市マスでは書いていない。ただ、居住を誘導していくエリアを将来的に考える必要があるので、所々にその考え方を散りばめている。今後は、都市再生特別措置法の考えによって峻別し、その考えの中で一緒に検討していこうと考えている。

委員 夢のある計画の方が良いとは思う。けれども、厳しさを書いておけば、市民が計画を見たときに、厳しい状況だから、まちづくりと一緒にやっっていこうという機運が高まると思う。

委員長 できなさそうな状況だから厳しく見るべきであるという見方もあり、あるいは、全体のポリシーになる骨太で基本的な考え方に則って土地利用の方針が出るようになっていけば良いという見方もある。今後、計画内容をブラッシュアップしていければ良いのではと思う。

委員 これから出てくる様々な行政分野別の計画と齟齬があってはいけないという意味での話なので、そのあたりは調整させていただきたいと思う。

委員長 関連する部分として、重点的土地利用の誘導という書き方は重要だと思っている。その整備の方策等の記述が、ワンパターンになっているため、もう少し真剣に考えているように書ければと思う。

委員 32 頁の「①子育てがしやすいまちをつくる」の「教育環境の充実（横須賀らしい英語教育、国際化教育等）」の中に自然教育の記述を入れてもらいたい。17 頁の「(2)都市魅力の創造」の中に「海と山の魅力を活用した都市づくり」とあり、横須賀の自然は昔からの売りの一つになっている。例えば、「横須賀らしい自然教育、英語教育、国際化教育等」としていただければと思う。

22 頁の世帯数の推計について、横須賀の特徴として2世帯や3世帯で住むことが横浜や東京よりも多い。若い世代が個別に住むことも大きいですが、横須賀では高齢の親を心配して同居する世代が多い。そのことを踏まえて、将来の世帯数の推計を考えていただきたい。

事務局 指摘の通り、横須賀ならではのということを考えたときに、海と山の恵まれた資源が横須賀にはあるので、自然教育の記述については前向きに調整させていただきたいと思う。また、世帯数については、いろいろと勉強して検討していきたいと思う。

委員 自然教育という概念については、環境政策の中でも自然に親しむことは重要であり、盛り込むことがふさわしい内容であれば、書いていただければと思う。

事務局 自然については教育だけではなく、実際にある自然に親しみ活用していくことが元

になっているので、そういった主旨で記述したいと思う。

委員 鉄道の複線化の記載については、表現を少し変えて、なくさないようにした方が良いと思う。例えば、29頁の「交通の骨格」の図で、国道357号の南下延伸が20年間でできるとは思えないが載せている。また馬堀海岸の先の湾口道路の矢印が海に出ている記載も同様である。都市内連絡軸への記述にある「都市内を連絡する交通を強化する」といった意味で、交通に関しては具体的に複線化とは入れずに、将来的に強化するということが良いのではないか。将来、交流人口や観光客が増えたときに対応するために、交通の軸を強化していくというイメージを残しておきたい。人口が先細ると30万人を切り20万人の都市を目指す雰囲気になってしまうので、複線化という表現を変えるにしても、まったく消してしまうことは今の段階では早すぎると思う。

委員長 行政の腕の見せ所だと思うので、知恵を絞っていただきたい。

委員 43頁の「⑧防衛施設用地」に「可能な限り米軍基地の返還と～」と謳っているが、返還の問題をここに明記して良いのだろうか。また、「自衛隊の集約・統合を図り～」とあるが、実際問題として集約できるのかということで、記載するには違う表現の方が良いという気もする。

「⑩漁港等」について、地場産の水産物は実際に買える形になっている。その上で抽象的だが「海辺の観光を生かしたサービス機能・宿泊機能等の集積を誘導します。」ということだが、どのような事を考えているのかうかがいたい。

事務局 防衛施設の記述は、市の基本的な考え方である。米軍施設の返還要望から池子が返還され、自衛隊でも大矢部の弾薬庫が田浦の方へ集約されて返還されている。今後返還後の土地利用を検討するときに、書かれていた方が良い内容だと考えている。漁港等については、海が近くて地産地消ができる西地域は、東側と違いリゾート感のある土地利用ができるエリアだと思う。そういったポテンシャルを生かしながら、できれば民泊などのサービス機能を広げていってほしいし、おしゃれな店も出てくるかもしれない。そうしたことが西地域を総合的に考えるうえでの一環となると思い書いている。

委員 防衛施設用地に関する英語表示の看板は、米軍基地と密接に関わる多くの外国人にとっても、また観光面でも必要であるが、この状況には、基地の返還と、基地の街の印象づけという、相反する面があり方向性が捉えづらい。漁港等については、市場を建て替える計画があるが、国、県、市レベルでいろいろと問題があることを聞いていると、こうしたことを謳われても実際に横須賀市が協力してやっていけるのかと疑問に思い聞いてみた。

委員 現行の都市マスと今回を比較して、大きな項目で変えた部分を教えていただきたい。

事務局 前回の見直しは、人口が減少に転じた状況を取り入れるため、それまでの人口増加の方向性を減少の方向へ変えるためのものだった。今回は人口が減ることを止めることはできないが、どれだけ減少を緩やかにしていくのかということで、方策として5年前の見直しでコンパクトシティの考え方を出しているが、それに加えて横須賀の特性を生かした魅力を全面に打ち出した土地利用を行い、交流人口や人口を増やしていきたいという考え方を取り入れている。

委員 今後、地域別の方針に入っていくということだが、これまでも地域を示す部分がかかり記載されている。記載されていない地域では行われなくなるのかといった疑問がある。例えば、スポーツ施設やスポーツ拠点では、Yハート地区が新たな土地利用として書かれているが、既存の不入斗地域などは改善していかないのかという問題があると思う。こうした問題について、全体でやっていくことと地域でこだわる部分についてお聞きしたい。

事務局 地域性を加味した内容については、次の第4章で地域を12地区に分けて具体的に記述する。そこで地区別の議論をしていただくことになる。

委員長 地区別にかかる時間はあと何回あるのだろうか。

事務局 次回の検討会議で先行的に2地区の地区別のまちづくり方針を示し、組立や全体像をつかんでいただく。その次の回で残る10地区についても議論していくという手順を考えている。日取りは次回が4月下旬、その次が6月中旬の予定となっている。

委員長 さらにその後、どのような予定で落ち着くのだろうか。

事務局 4月下旬の第4回検討会議と6月中旬の第5回で地区別のまちづくり方針について見ていただき、その後、8月、9月と続くスケジュールを考えている。場合により、引き続き議論を深める必要があれば議論していただき、その先は全体的な形の意見をうかがいながら、まとめていきたいと考えている。年末から年明けにはパブリックコメントの手続きへと進み、市民の皆さんに示せる形になると考えている。

委員長 現時点でピンとこないところも、そのように一巡すると見えてくるものもあると思う。

委員 交流人口を増やすことや観光地としての魅力の他に、横須賀市を中から変えていくことに関しては、ユニバーサルデザインを推奨することが、事故の防止にもつながり、歩きやすい街になると思う。新しい道路をつくることができなくても元々ある道路を安心して通れるように、歩行者空間を再構築していく考え方が必要だと思う。お年寄りの方が外に足を運ぶことが健康につながるように、ユニバーサルデザインを中心として、障がい者の方もだれもが安全に暮らせるまちづくりを推進していただきたい。

委員

私はずっと地元で育ち、観光には良いまちだが、住むまちとしては不便もあると感じていた。けれども、観光の魅力を前に推し進めていくことが、住みたいことにもつながると思う。

若い世代が減ってしまうことに関しては、ショッピングモールなどが周りの都市に比べて少ないことが関係しているのではと感じる。

私の地元は長井で、鉄道駅が遠いので都内へ行くことも少なく、外へ出るようになってから地元の方の良さをより感じるようになったと思う。

3. その他

- 事務局より、横須賀市マスタープラン検討会議意見等提出シートについての説明と依頼及び次回スケジュールについての説明を行った。

4. 閉会